

人生劇場

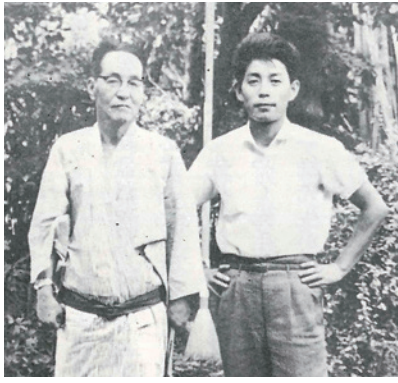
愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文

都築久義先生が永眠されました(本誌19頁)。

安城で生まれ育った先生は、青雲の志を抱き早稲田大学文学部に進学し、同じ三河出身の作家尾崎士郎(以下、士郎)の書生となり文士を目指します。

大学卒業後、本家の長男であった先生は安城に戻り高校教員となりますが、そのかわら月刊誌『士郎研究』を発行し、その資料収集のため毎年上京。左の写真は、昭和三十八年士郎の自宅の書庫整理を一週



都築先生(右)と尾崎士郎(左)尾崎邸にて

間ほど手伝っていたときに撮ったものです。その翌年士郎は亡くなりますが、先生は毎年墓参りを欠かさず、五年後『実説人生劇場 尾崎士郎の生涯』を出版し、墓前に捧げられました。

士郎の自伝小説『人生劇場』に登場する吉良常の祖先吉良の仁吉を歌った村田英雄のヒット曲に『人生劇場』があります。その一節「やると思えばどこまでやるさ……義理がすたればこの世は闇さ」に通じる先生の義理堅さです。それは本学の教員となつてからも変わることはありません。

昭和五〇年愛知淑徳大学が開学すると、先生はその創立メンバーとなり近代文学を担当。大学教員となられた先生は、毎年のように論文や本を刊行され、やがて新聞、テレビ、講演と大活躍をされるようになります。

四三歳で学長職に就いたわたしは、そんな多忙な先生に学生部長を、さらには副学長をお願いしましたところ、いずれも快くお引き受け下さり、その職責を十二分

に果たしていただきました。たとえば、入試の総括責任者でもある副学長となられてからは、何かあるといけない、と毎年入試前日には布団を持ち込み大学で寝泊まりされたほどです(当時入試会場は長久手キャンパスでした)。そのおかげで、早朝から降り出した雪で、受験生が多く利用する本郷駅からのバスが止まった時、先生の迅速な陣頭指揮のもと、何とかその日のうちに入試を終えることができ、ホッとしたこと

が、今はなつかしく思い出されます。先生が、脂が乗っていた研究活動を犠牲にしてまでも二三年間の長きにわたり尽くしてくださったのは、早稲田大学の先輩として稲門教育会で長年にわたり目をかけてくれ、大学教員への道筋をつけてくれた本学初代学長の亡父小林素三郎への恩義からであろうと思うと、感謝の気持ちで一杯になります。ありがとうございました。

先生は本学を退職されると、長らく中断していた研究活動を再開し月刊誌『士郎研究』を復刊。さらには著書『昭和の戦争

と文学者』を刊行し、大学教員としてやり残したことをやりとげられました。最後となつた著書のあとがきの結びは人生の伴侶への感謝といわわりです。

わたしの主な研究テーマは尾崎士郎、戦時下の文学、郷土文学の3領域であり、それぞれの領域に関して数冊ずつ著書を刊行してきた。しかし、20年余り本を出していないことになる……わたしの勤務先の立場も一段落ついたことを機に、未刊行の拙稿を久しぶりにまとめてみてはどうかと勧めてくれたのは妻の亮子である……妻はわたしが研究活動を始めた当初より、資料の収集や整理に協力してくれた……彼女の協力なしには、私の研究活動も続けられなかったことを特に記しておきたいと思う。

先生はやるべきことをやりきり、義理人情に厚い、立派な人生の幕を下ろされました。

合掌